



## 「獅子の育児」

院長 西田 敬

「強い仔に！」獅子は敢えて愛児を千仞の谷底へ蹴落し、攀登り、這上って来た仔のみを育てると謂う。見果てぬ夢を吾が子に託し生命を繋ぐ、親の欲と云うより寧ろ強靱この上ない「種の保存」への宿命的な執着。斯くして仔の生命と一族の遺伝子は連結される。育児は既に開始されて居る。然らば、母親が我が子に栄養を与える、語り哺育は何時から始まる？ そりゃ簡単、俗に握髪吐哺とも云うように哺育の哺は口中にある食物の事。即ち授乳こそが子育ての開始。いんや、血統とも云うが如く、育児に重要なのは母親の血筋、血の繋がりが、語り胎盤循環の始まりこそが子育ての雛形。胎盤循環の授乳に匹敵する重要性は、我らを胎生哺乳類と謂うが如し。排卵で棲家の卵巣を追われた卵は文字通り徒手空拳。鳥類じゃあるまいし弁当(卵黄)持参なんて奴は居ない。御負に喰うしか能がない、居候の精子まで抱え込む羽目に。哀れ薄幸の母子、過酷なる運命や如何に。御あんじ召さるな。棄てる神あれば、拾う神あるが世の

なら習い。卵と精子との出会いは滋養に富む卵管液の滔々たる流れの中、一瞬にして連結。戦後、数寄屋橋の雑踏の中で出遭った真知子と春樹の如し。女湯が空になる、差詰め終戦後版の「冬のソナタ」か。「君の名は」大和女性の紅涙を絞った菊田一夫原作によるラジオドラマの名作。生殖管の上皮細胞が分泌する卵管液(組織栄養:histiotroph)で養われた受精卵は更に高濃度の血流栄養を求めて子宮内膜に接着、浸潤(着床)する(haemotroph)。然し、haemotrophを受ける際の懸念は其の酸素含有にある。誕生から46億年、当初の20億年ほどは、供給源である藍藻が徐々に繁茂していったにも拘らず、地球の大気には酸素が殆んど含有されて来なかった。元来、嫌気性であった地球生物にとって酸素こそは諸刃の剣、人畜に有害かも知れぬ酸素呼吸を開始するに当っては、地球上の生物が何処まで酸素に耐え得るかを知悉しておく必要があった。胎生期に出現した酸素catastrophe(恐慌)。文科省の傘下になる海洋研究開発機構の生真面目な労作[1]に拠れば大気中の酸素濃度は漸増したのではなく、氷河期を境として急峻に上昇している。超レアメタルとも云える貴金属、オスミウムを使用した地球史における酸素大変動の確固たる傍証。

### 引用文献

[1] Sekine Y, Suzuki K. et al.; Osmium evidence for synchronicity between a rise in atmospheric oxygen and Palaeoproterozoic deglaciation. Nature Communications 2: 502, 2011

